

第37次第2回
宮城県社会教育委員の会議兼
第12次第7回
宮城県生涯学習審議会
会議記録

令和4年8月22日(月)

宮城県教育委員会

第37次(第2回)宮城県社会教育委員の会議 兼

第12次(第7回)宮城生涯学習審議会 会議記録

○ 日時 令和4年8月22日(月)午後1時30分から午後3時30分まで

○ 場所 宮城県行政庁舎 特別会議室(4階北側)

○ 出席委員(11名)

伊勢みゆき 委員 遠藤 智栄 委員 加藤 拓馬 委員 黒沼 俊郎 委員
坂口 清敏 委員 菅原 真枝 委員 須田 一憲 委員 中保 良子 委員
野澤 令照 委員 増田恵美子 委員 松田 道雄 委員

○ 欠席委員(4名)

石井 義之 委員 門脇 果世 委員 金 祐子 委員 高橋 守夫 委員

○ 事務局

武田 健久 参事兼生涯学習課長
鎌田 光伸 生涯学習企画振興班長 加藤 純一 同副班長
石川 寛之 社会教育推進班
平林 健 協働教育班長 小泉 一樹 同副班長

次 第

- 1 開会
- 2 議長あいさつ
- 3 議事
 - (1) 報告・協議
 - ・第37次宮城県社会教育委員の会議兼第12次宮城県生涯学習審議会のテーマについて
 - (2) その他
- 4 諸連絡
- 5 閉会

(司会:加藤)

只今から第37次第2回宮城県社会教育委員の会議兼第12次第7回生涯学習審議会を開会いたします。なお、情報公開条例第19条によりまして、県の附属機関の会議につきましては原則公開となっております。本会議につきましても、公開により審議を進めさせていただきます。

議事に入る前に、前回の会議を欠席されております遠藤委員、加藤委員から現在の活動等を含めて自己紹介をお願いしたいと思います。

(遠藤委員、加藤委員から自己紹介)

本日は、4名の委員が、諸般の事情で御欠席となりましたが、委員15名中11名の出席がございましたので、「生涯学習審議会条例」第6条第2項の開催要件の委員の半数以上の出席を満たしておりますので、本審議は成立することを予め御報告いたします。

では、野澤議長より御挨拶頂きます。よろしく申し上げます。

(野澤議長)

皆様こんにちは。大変お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。今回の会議は、2回目になりますけれども、今日はテーマ設定まで、かなり踏み込んだ形で審議を進めてまいりたいと思います。忌憚のない御意見をいただけますように、よろしくお願いいたします。

(司会:加藤)

ありがとうございました。それでは、生涯学習審議会条例第6条第1項の規定の通り、この後の議事進行につきましては議長にお願いいたします。

(野澤議長)

はい、それでは進行を担わせていただきます。

それでは、議事に入る前に本会議における傍聴希望者の状況につきまして、事務局から報告をお願いいたします。

(事務局:小野)

本日の傍聴希望者はありません。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。なお、情報公開に関する取り扱いにつきましても、あらかじめ確認させていただきますけれども、今回の審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱第8条によりまして、本日の会議資料及び発言者名を明記した会議録を県政情報センターに置いて3年間県民の皆様が閲覧できるように提出することになっておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

では、議事、報告・協議に入らせていただきます。今回の議事の中心になりますのは、テーマの決定ということになります。テーマ及び意見書作成までにつきまして、事務局から説明をお願いします。

(事務局:加藤)

それでは、説明をいたします。資料1と資料2がお手元にはあるかと思います。それを元に説明をしていきたいと思っております。委員の皆様にはあらかじめメールでお送りはしていましたが、若干、修正した部分もございますので、その辺は御承知おきいただきながら、いろいろと御意見をいただければと思っております。

まず、資料1を御覧ください。資料1の右側に第1回の会議からという欄がございます。前回から第37次がスタートしたわけですが、前回の会議でテーマの方向性については、大方賛成をいただいたと思っております。意見としては、

- ・テーマに関して、第36次の視点や目指す姿を継続していくということはいい。
- ・住み方、学び方、関わり方というものにフォーカスした内容にしてはどうか。
- ・子ども、若者を中心に据えた事務案でいいのではないか。
- ・学校教育と社会教育をつなぐ人材育成が必要ではないか。

というものでした。

次に、資料1の下の欄ですが、子ども、若者を取り巻く社会の変化というところを記述しております。まず少子化の進展に伴って、本県の総人口に占める子ども、若者の割合は年々減少。インターネット社会の進展により、ネット上のコミュニケーションのトラブルや、いじめネット被害による犯罪被害の増加などもうかがえます。また、核家族化によって、子育てに対する不安、孤立化の深まりというのも見られます。そして、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響で、長期的

な臨時休校や社会の急激な変化による新しい生活様式が実践されており、学校の先生方のお話を聞くと子供たちも、なかなか落ち着かない状況が続いているというお話も聞かれます。さらに、持続可能な社会の実現ということで、誰ひとり取り残さないという考えの下、持続可能な開発目標達成に向けた取組の実施が、様々なところで行われています。

昨今は、部活動の地域移行ということが大きく取り上げられてきております。運動部だけではなく、文化部に関してもそうした動きというのが出てきております。教育のあり方や社会のあり方が、大きく問われているということでございます。

それを受けて宮城県内の子ども、若者の現状についてです。様々な課室が行っているアンケートから関わる項目をピックアップしております。この辺は、まだまだ深めていかなければならないところだとは思いますが、現時点で概要について挙げさせていただいています。

教育企画室が行っている「幼児教育に関わるアンケート」から、「親として成長していくための学ぶ機会は充実していますか」という質問に対して、約5割は「充実している」と回答しています。「居住する地域において、自然体験活動など参加できるイベントや催し物がありますか」という質問に対しては、「ある」と回答した人は約2割という結果でした。「令和2年度の児童生徒問題行動不登校等生徒指導上の課題に関する調査」からは、不登校の出現率が小中高ともに全国と比べると高い傾向が伺えます。次に「令和4年度全国学力学習状況調査」からは、「将来の夢や希望を持っていますか？」の質問で肯定的に答えている児童生徒の割合は、小中学生ともに全国平均より高い傾向にあります。また、「今住んでいる地域の行事に参加していますか？」の項目でも、肯定的に答える小中学生が全国平均よりも高く、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか？」の項目でも、全国平均よりも高い傾向が伺えます。

さらに、「公民館等職員研修会等のアンケート」からは、各地域での公民館事業への若者の参加が少ないことが、多くの公民館で課題に挙げている状況が見られます。

先ほどもお話ししましたが、このあたりの子ども若者の現状については、まだまだ調査等が必要になってくるかと思えます。

では、資料2を今度は御覧ください。

こちらは最終的な意見書作成イメージということで、提案させていただきます。資料2の左側は、テーマ設定の理由です。こういう現状や課題があり過去の意見書ではどのような審議を重ねてきたのかということを受けて、テーマ設定を行っていければと思います。

それを受けて、今後3回目以降は様々な調査や提言に向けた具体的な話し合いを行っていた

ければと考えます。

調査対象や場所というのは、県の生涯学習の事業や関係課室の取組、県内のさまざまな市町村や、地域との連携で特色のある活動をしている小学校、中学校、高校になろうかと思えます。場合によっては、県内だけではなく、県外にも目を向けてオンラインで繋ぎながら先進的な取り組みをしているところを学ぶということも行っていければと考えております。

調査や視察を受けて、最終的に具体的な提言ということでテーマに迫っていければと思えます。その提言を受けて、次の新たな県の施策や市町村への支援に繋げていければというイメージでございます。

以上で説明を終わります。よろしく申し上げます。

(野澤議長)

ありがとうございました。只今事務局から資料をもとに説明をいただいたところでございますが、ここからは委員の皆様から御意見をいただきながら、テーマの設定に向かっていきたいと思えます。

それでは、資料1で確認をさせていただきたいと思えますが、今も説明がありましたが、前回の会議の中で大きなテーマ、第36次の視点や目指す姿というのは、継続していこうということ。前次の意見書では、非常に包括的なテーマで全体を見通した形で進んできたということがございましたので、この37次では、その中からよりターゲットを絞った形で提言をまとめていくという方向になろうかと記憶をしております。それでは、こここのところをまず確認をさせていただいた上で、皆様から御意見をいただければと思っております。

事務局案としていくつかそこに掲げてありますが、その辺も参考にさせていただきながらの意見をいただければと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

坂口委員どうぞ。

(坂口委員)

もしかすると聞いたのかもしれませんが、「子ども若者の現状」のところでは令和4年度の学力調査で3項目があり、全国平均より高いと言われましたが、その数字が知りたいのと、全国平均より高いという高さの意味が定量的に見て有意な高さなのか、それともあまり変わらないのというところを教えていただきたいと思えます。

(野澤議長)

では、事務局お願いします。

(事務局:加藤)

全国学力調査の結果の詳細が手元にはないのですが、中学校の国語は全国平均並みの結果でありましたが、それ以外は全国平均よりも低いという結果です。

(坂口委員)

そういう結果ではなく、ここに書いてある3項目でレベルが高いとか低いとか、そこについてです。

(事務局:加藤)

数値的なものですね？

(坂口委員)

はい。学力については、私も別のところで触れたことがあるので、それは拝見しています。

(野澤議長)

はい、ちょっと事務局の方で準備をいただく間に、他の委員の皆様から重ねて御質問などございましたら、お聞きしたいと思いますので、いかがでしょうか。

(事務局:加藤)

数値的なものですが、全国より高いといっても0.何パーセントとかということですが、例えば、「将来に対して夢を持っていますか」という質問に対して全国平均が79.8%、宮城県は80.6%ということで、全国平均よりも0.8ポイントほど数値的には高い。「将来役に立つ人間になりたいと思いますか?」という質問に対して全国平均93.8%、県が94.4%というように宮城県は全国平均よりも高い傾向が伺えるということでございます。

(坂口委員)

分かりました。全体的に高いんですね。

(野澤議長)

はい、加藤委員お願いします。

(加藤委員)

その数値についてですが、何で高いのですか？こういう取り組みがあるからではないかという分析はあるのでしょうか？

(野澤議長)

分析ですね。その辺は事務局の先生方から見て何か感じることはございますでしょうか？

(加藤委員)

毎回高いのでしょうか。

(事務局:加藤)

毎回こんな感じで数値は高いです。全国的にもこれぐらいの数値は出ているのですが、高校生にこのアンケート結果がどうなっているのか？個人的には知りたいところですが、そのあたりの数値がみつけれられません。

(加藤委員)

ありがとうございます。

(黒沼委員)

現場の声というわけではありませんけど、恐らく小中学校の多くの学校の学校教育目標の中に「夢を持ち」とか、あるいはそういったキーワードをベースにしながら学校経営をされている。これは宮城県だけでないのかもしれませんが、将来の目標や生き方について考える機会を設け、それぞれの学校で努力しているのが僅かではありますが、この平均よりは上回っているということに繋がっているところもあるのかなと感じます。また、新型コロナウイルス感染症流行の中ではありますが、各学校に地域の人を招いたりして、子供たちに具体的な夢を抱かせるような工夫をしているからではないかなと推察されます。

(坂口委員)

これに関連してですが、小中学校では、「地域活動に参加していますか」という問いに対して意識が高いにも関わらず、地域ごとに見ると若者の参加が課題である、というギャップが一方で見られます。そこに向けて我々は何か提言をしていきたい。目指す姿に「学んで楽しい」と書いてあるのですが、この3つの言葉で学んで楽しいだけがすごく曖昧だと思います。若者の育成を訴えるのであれば、何を学ばせたいのか、子供たちや若者は何を学びたいのか、そこをきちんと精査しないとミスマッチが起こって、こちらがいくら旗を振っても無理なのではないかという気もしています。このアンケートの結果と現状を見ての率直な意見です。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。伊勢委員お願いします。

(伊勢委員)

率直に言って、宮城県の子ども若者の現状、これだけでは足りないというのと、本当の課題が何なのだろうと分からないというのが正直なところ。先ほど先生方も述べられていたとおり、小中学校では、一生懸命努力をされていて、その地域に出る自立の段階で若者の参加が難しい。それは公民館だけじゃなくて、地域社会の中でどういうところの接続が上手く行っていないのか、高校だったり大学だったり、その先の就職というところも含めてだと思うのですが。一方でここには出てきていませんが、高校にも不登校が多いからこそ、社会に接続ができなくて、ひきこもりの問題であるとか就労の問題で定着をしないというのも産業界からも出されています。そうした課題に手をつけ始めているところだと思うのですが、今、坂口委員がおっしゃったとおり、一体どこを目指して私たちは提言をしていくのか？これから議論を重ねていけたらいいと思います。

余談ですが、昨日、ある高校生のイベントで高校生が社会課題に対していろんな解決策を考えて発表するという場に同席したのですが、当事者である高校生から出たのが、「ちょっとした悩みを相談するところがない」という声が上がっていました。私も石巻でそういう場を作り始めましたが、通ってくる若者たちが言っているのは、「ちょっとした相談を誰にしたらいいのか分からないし、公的機関だと自分が該当しないと思っている」ということです。やはり気軽に相談できる場とか大人と若者との関係作りだと思うのです。信頼できる大人との関係作りを高校時代とか、もう少し下の年代の関係作りが一つのヒントになるのかなと思っています。場を作ったところに来るわけでもないし、いかに信頼できる関係性やそういう大人と出会えるかというところが大切になってくるのかなと考

えます。

(野澤議長)

ありがとうございました。他の委員の皆様いかがでしょうか。

(増田委員)

テーマの例にあるものを見ていると気になる点があり「未来を担う」とか「地域を担う」という重荷を背負わせてしまうような視点というのは、あんまり良くないと思います。地域の人と関わることで、自分もこういう地域を作って行きたいという思いが湧いてくるものだと思うので、子供や若者が自立的に育っていく視点が大事ではないでしょうか。それは、環境作りという曖昧な言葉ではなく、結局そのために何が大事かを知っている大人を増やし、繋げていくことが大事。それがない限り、システムをどんなに整えてもやればやるほど、視点が違って子供が重荷になるだけになってしまうので、根本的なところを見直してテーマを決めていきたいと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。他の委員の皆さんはいかがでしょうか。

中保委員お願いします。

(中保委員)

今回のテーマ、子ども、若者というのを中心にというお話なのですが、私自身は自分の活動の中ですごく感じるのが、様々な若者に対して仕掛けて行くのはやはり大人であるし、今この社会教育の中心になっている高齢者の方、シニア世代の方々の支えというのが非常に必要だと思います。実は、私たちは本当のところは相手のことを少しも分かってないと思います。例えば、今の若者は、高齢者たちが何を望んでいるかの情報が少ないし、高齢者の方々も今の若者が何を考えているか分からないというのが現状ではないでしょうか。実は私、好きなテレビドラマがありまして、それは若者が教育アプリを開発する会社を起ち上げ、その成長を描く物語なのです。そこで少子化のために教育アプリというのは先がないと否定された中で、図書館に行っているいろいろな世代の人が図書館で学んでいる姿を見て、いくつになっても様々な人たちが学べる機会があるのだというのを初めて気付く。そこに衝撃を感じたのですが、私たちにとって生涯学習は、常識のように思いますが、若い人たちにとっては、かえってそれが目新しいのかと驚きました。生涯学習という言葉

は出てこないのですが、「大人の人たちが学びたいものは何だろう」という学びのコンテンツを出していったときに出てきたのが、ペン習字とか、ピアノとか、習字とかなのです。つまり、若者は、高齢者がそういったものを学びたいと考えているという衝撃の事実なのです。高齢者の方たちをひと括りには出来ないのですが、長く生きてしまうことにすごく不安を感じているのですね。自分が望むと望まざるに関わらず、長く生きてしまったらどうしよう、そのための健康や経済的なものが非常に不安で、それを何とか払拭しながら、自分たちのこれからの生活にやりがいを見出していく。そこが日々せめぎあいの葛藤をしているというのが高齢者の現状ではないでしょうか？

私の関わっている若者たちは、この時代の激しい流れの中で自分たちの目指すというよりは、自分の価値というものをどうやって見い出していくかということで、様々なスキルを獲得するのに貪欲で、むしろ意識がそちらに行っているように見えます。地域のことを分かろうとか、地域のために何かを尽くそうというところまでは、中々余裕がないというのが現状だと思います。

まずはお互いがどのような考えを持って生きているかということ、自分たちで分かり合えるようなところに戻らないといけないのではないかと考えます。

公民館などの学びの場に若者が来るというのは、相当難しい状況ですが、国の動向の記述にある「リカレント教育」が仕事のための学び直しなのですが、実はシニアの世代は、生活を自立するための趣味とか、そういったものに目が行っているのではなくて働きたいという思いの中で学んでいることが多くて、新たに資格を取って、自分のこれからの人生ももう一回仕事をしたいと考えている高齢者の方たちがたくさんいます。

ですから「リカレント教育」で若者も自分の目的を持って集まる。高齢者もその目的を持って集まる、といった場を開いて、そこでの交流会が生まれ、お互いが生きている社会の状況も話し合える場、触れ合える場というのが作れるのかなと考えていました。やはり、どの世代がどう学びたいかという、それを分かる場を作らなければ、今回の議論は中々進まないのかなと考えます。以上です。

(野澤議長)

はいありがとうございます。他に委員の方々いかがですか。

須田委員お願いします。

(須田委員)

私も、子ども若者を中心とした方向性について賛成しています。なぜかという、やはり今、人口減少社会にどう立ち向かうというのが課題になっていると思います。さらに、Society5.0 の時代に生きていく。ある意味、成熟社会とも言える新たな段階に踏み出していると思いますので、それを社会教育側からのアプローチを考えるというのは非常に良いのかなと思います。さらに今、高等学校においても「社会に開かれた教育課程」というのは求められていますので、タイミング的にも良いのではないかと考えています。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。他によろしいですか。

松田委員お願いします。

(松田委員)

私も子ども若者の必要性、重要性ということに同感です。今後どのように進めたらいいのかということについては、やはり早い段階でのリサーチやその当事者(子ども若者)の思いを聞く機会があればいいのかなと思います。

県の方では、各地方事務所でそれぞれに人口減少対策の事業をされています。仙台地方振興事務所では、「女子大生の流出」をどうするかということテーマに担当者の方とお話したのは、「おじさんたちがそれを考えていても先に進まないの、今若い人の思いがどうなのか、本人たちにも話を聞かないとダメなんじゃないか」ということになりました。そこで、前期ゼミの大学生に参加してもらい、いろいろ聞き取り、僕も一緒に話を聞きました。結論としては、「働くこと」。宮城県内にどれぐらい若い人たちが就職したい企業があるか、そういったところまで生涯学習として踏み込むかどうかということもあるのですが……。また、例えば仙台に若い人たちが来たとして、駅を降りて目の前のデパートが閉店している状況を見て、若い人たちはマイナスのイメージを持つ。今度は東京に憧れる。ですから住んで楽しいということの意味合いが我々も理想論だけでなく、やっぱり消費の楽しさとか、そう言ったことが若い人にとってはあるわけです。それを人口が少ない地域で望んでいたら、もう無理だということになる。ではどうするか。社会学の一般論では、以前から人口が多いところは、たくさんのおたく文化が山ほどあるので、どうしても人口多いところに流れるという理論が定着している。

ですから、多様な趣味とか関心を地域で受け入れるように、今まで公民館などで取り組んでい

なかったような切り口にどれぐらい地域で取り組めるかというのは一つあるのかなと思っています
ころです。以上です。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。坂口委員どうぞ。

(坂口委員)

さっきも言いましたが、やはり彼らが何を欲しているのか、考えているのかが大事だと思います。
資料にある「子どもと若者」の定義なのかもしれませんが、年齢の幅が広すぎますね。仮にこれが
定義だとして、これで子どもと若者という言葉で何かやろうとすると、絶対間違うと思います。です
から、あまり細分化するとおかしいかもしれませんが、ある程度我々が通常体感しているような子
ども、若者に実感できるような区切りで、彼らが一体どういうことを求めるのか、彼らから見て地域
のために何できるのか、地域は子ども若者に何を求めているのかを明確にすることも必要なの
かなと思います。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。遠藤委員は様々な若い人たちと関わりをお持ちですけど、いかが
でございますか。

(遠藤委員)

テーマとして子ども若者というのはいいのではないかなと思っています。県の事業で東北エリア
の協議会にも関わらせていただいているのですが、そこでは困難な子供たちの状況というのがず
ごく見えてきます。困難な子供たち若者たちというのは、やはり家庭環境も複雑だったりしますか
ら、いろんな人たちとの関わりを通じて安心できる大人とか、いろんな生き方とか価値を持つ大人
と触れ合うことで、困難な子供たちが大事な何かを育む要素になるのではないかと思います。しか
し、そうした情報や話を誰から得ることができるのかという状況がまだまだ整っていない。そういう
意味で地域の連携というのは非常に大事だとつくづく感じながら、一緒にサポートをさせていただ
いております。

あと、こちらの現状のところにあるように、公民館事業への若者の参加が課題と書いてあるの
が、私もいろんな公民館の方々とか、それをサポートしているまちづくり協議会の方々とお話する

と、必ずこの言葉が必ず出てきます。そうした時に、「どのように子ども、若者、子育て世代のお声とか聞いてるんですか」と聞くと聞いていないんですね。ですから、そういうことを社会教育施設の皆さんがまだまだ認識されていない。課題だと思いながらチャレンジできない状態がずっと続いているというのは、まさに課題だなと考えています。

私は、安易に「子供たちが地域に愛着を持つ」というように考えるのは、好きではありません。やはり地域で楽しい経験、驚く経験をするからこそ、その子供たち若者たちの心と体にいろんな影響が及んだ結果の愛着だと思います。愛着、愛着と言うのもどうなのかなと思うこともありますが、そういった意味で社会教育施設の皆さんには、いろいろな工夫で声を聞いて活かすということ、そして、支援の現場にいらっしゃる皆さんと地域の人たちがどのように信頼関係というか、ざっくばらんにおしゃべりできる場を作っていくのかということも提言しながら、現場の皆さんが使ってもらいやすいようなものにしていくという方法もあるのではないかと思います、資料を拝見しておりました。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。菅原委員いかがですか。

(菅原委員)

資料を送りいただいて拝見した時に思った印象は、皆さんから御指摘があったように、「子ども若者」とは一体誰のことを指しているのか、そして範囲がすごく広いなということでした。

年齢によって本当にその学ぶ内容も、あるいは時期に対する関心の内容も異なっている世代の人たちを広く捉えつつも、少し分けて整理しなくてはいけないと感じました。

あくまでも例ということではありましたが、この資料1の真ん中の提案のところに「若者人材の育成」とありますが、子供たちを育てるとか、若者人材を育成するというのがテーマではないように感じます。子供たちや若者が、地域の中で学んだり働いたりしている人との繋がりの中で、理想的な地域の生活をということの意味していると思いますので、社会教育を通じて、あるいは社会教育が土台となって地域がつけられ、そこで安心して子供たちや若者たちが生活をして行けるというイメージなのかなと思いました。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。今、委員の皆様からそれぞれ御意見と言いますか、御感想もいただきま

した。

実は私が最近経験したことで、ジュニアリーダーのOBを集めて、コミュニティースクールを推進する上で若者たちにどう関わってもらおうか、どんな意識で見ているのだろうか、という話を若者たちにしてもらったことがあります。その中で出てきたことが、実はコミュニティースクールや地域学校協働活動に「自分たちが関われるんだ」「関わったら何か起きそうだ」という感想でした。ジュニアリーダーのOBというと社会教育の中で活動してきた子供たちという、ごく限られた部分はあるのですが、やはり関わり方というか提案の仕方、情報の発信の仕方によっては、もっと積極的に関わってくる若者たちも増えてくるのだろうと感じました。

それで、「子ども若者」というところを一つの柱にするということは、これは皆さんの御了解をいただいたと思うのですが、先ほどからの御意見を踏まえながら、今度は具体的にどういった形でテーマを決定していくかを考えていきたいと思うのですが、こんなものではどうだ、というような提案などございましたら、どんどん出していただけたらありがたいですけれども、どなたからでも結構でございます。

伊勢委員をお願いします。

(伊勢委員)

このテーマの例は、大人目線で本人たちがどこかに行ってしまうので、やはり私は子ども若者をどう表現するかというのは置いて、子ども若者が中心になるとか、主役になるというような意識を私たち大人側が持つ方がいいだろうなと思っています。子ども、若者を真ん中に置いた考え方を、そういう言葉の使い方、そういう場、環境を作ったり、関係を作ったりするのが周りにいる私たち大人の役割だと思うので、そういうのをうまく表現できたらなと思いますね。

(野澤議長)

ありがとうございます。今、学校教育に関わっている中で、特に感じるのが教師主導で教育を進めて来ましたが、今大きく改革がなされている。まさに学びの主役は子供であるということがよく言われていますが、まさにそこにも繋がるようなお話ではないかなと思います。他の委員の方々はいかがですか。

坂口委員をお願いします。

(坂口委員)

私も「未来を担う」というのが頭につくのがすごく気になっていて、このような枕詞はやめた方がいいような気がします。何で担わせなければいけないのか、彼らは担っていると思っているかもしれませんが。もっと子ども若者に対して我々が何をしてあげられるのか、若者には何を求めるのかというようなところをきちんと明確にした方がいいと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。そうですね、先ほど来お話がありますけれども、やはり主役である子ども若者が見えてこないテーマ、何か大人が若者を育てるところから抜け切れていない。そこがやはり大きく変化をして行かなければならないポイントだろうなということは、御意見の中から出ていました。

増田委員どうぞ。

(増田委員)

「人と関われない子は、だめだ」というような感じを持たれないほうがいいかなと思います。今、人と関わるのが苦手でも、その子の能力を発揮できる環境が整いつつあります。子供や若者が創造的に生きられるような地域をつくるというように、どの子もその子なりの創造的に可能性を伸ばせるとか、創造的に生きるとか、一人一人に焦点を当てたような表現の仕方をみんなで考えられたらいいなと思います。関わりを持つとか、絆をつくろうとかいうところに絞ると、それは未来を担うというのと同じくらいに、今までの私たちの価値観に縛っているような感じがします。

(野澤議長)

ありがとうございます。加藤委員どうぞ。

(加藤委員)

子ども若者が中心になるという話のテーマで言うと、人材という言葉はあんまり使わないかなと思います。何か目的があつての材としての人ということなので、この用語を使うのか使わないかで、私たちの意図することは一つ見えるのかなと思います。人材という言葉が悪いとは僕は思わないので、使うのか使わないのかみたいところは実は一つ重要なところかと感じたところです。

もう一つは、今までの社会教育・生涯学習の取り組みをされてこられて、施策や事業の成果や

課題を知りたいなと思ったところです。それは事務局の皆さんからもそうですし、委員の皆さんからも聞きたいなと思ったところです。

例えば、今ジュニアリーダーという話が出ましたが、宮城県の子供たちの非認知能力を高めるための大きな貢献をしていた事業なのであれば、それを今後どのように伸ばしていくのかというところの議論になっていくのではないかと思います。残念ながら気仙沼では、ジュニアリーダーはひと昔に比べると衰退しているように感じます。であれば何でジュニアリーダーは今、衰退しているのか、では、そこに対して調査をかけてみようと。また、今のデジタルの技術で何か新しく制度自体をリノベーション出来ないのかとか、そういう具体的な議論になって行くのではないかなと思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。いかがでしょうか。はい黒沼委員。

(黒沼委員)

事務局からお示しいただいた3つのテーマ例を見て、私の今の立ち位置から考えた時に一番しっくりきて、心が寄せられるなと思ったのは2番の「子ども若者が育つ環境づくり」でした。

実はこの夏、本校の学区ではコロナ禍ではあるものの、区長さんあるいは地域公民館周りの大人が一生懸命になって、3年ぶりにお祭りをやろうという動きになって、学校に情報を寄せていただきました。学校では、子供たちに出番、役割を提供できる、地域の方々からは認められる場を提供していただけるなと思って参加させることにしました。学校には、地域担当という教員がいるので、その地域担当の先生方は担当する子供たちに投げ掛け、子供たちはそれに積極的に参加しました。今日から1学期の後半が始まったのですが、その時に地域の方々からいただいたお礼状を全校生徒に紹介しました。その文面の中にあっただけですが、中学生が小学生に対して気遣いや目配りや声掛けを一生懸命してくれたと。地域からすれば、3年ぶりの祭りが地域やあるいはそこに育つ子供たちとの繋がりの場だったのだということを改めて感じたのかなと思いました。これからも秋口にかけていくつかそういうお祭りもあるので、私としてはこれを一つ良い例として、それぞれ地域に参加してみようと思います。だから私はこの3つのテーマを見た時に、地域と家庭を繋ぐ役割を果たすとか、そういったことにも繋がるのかなと思い2番目がいいと思いました。

もし事務局でこの3つの例を挙げられたその背景や狙いを御紹介いただけるのがあれば、それも聞かせていただきたいなと思いました。以上です。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。後ほど事務局から今の黒沼委員のお話について御説明をください。
中保委員をお願いします。

(中保委員)

私は3番目の「協働力」というのはすごくいいなと思いました。これはやはり地域を作っていく人に必要な大きな力だと思います。この言葉は残してもいいのかなと。

また、未来を考えるプロジェクトの創成というか、自分たちの未来を考える、つまり、子供も大人もお年寄りもみんながこれからの地域の未来を考えるそういったプロジェクトを創生するということが必要じゃないかというのを感じました。過去に成功した例として、成人式を今度成人になる若者が企画してやるというのが全国的にも広がって、あれはやはり自分たちのイベントを自分たちが参画してやるという大きな成功だったと思います。これを少し視点を変えて、敬老会を地域の若者が企画する。そういったものを求めたとして、もちろん企画にそのまま携われる人もいれば、自分はそのままでできないけれど、自分は絵が得意だからイラストでも描こうとか、いろいろな形で参画できる。みんなで敬老会を作り上げるというような視点ですね。自分たちのために頑張るのは当たり前だと思うのですが、これから地域でいろいろな人たちと生きていくことを意識する若者にとっては、そういった地域の違う世代の人たちのために自分たちが参画するというのはすごく大事だと思います。そういったことを取り入れて、地域の未来を考えるプロジェクトとしてある程度具体的にしていってもいいのではないかと思います。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。先ほど加藤委員から社会教育の中で成功した事例はという話がありました。今の成人式の事例というのが一つかなと思いますが、その辺も含めて事務局の方で先ほど黒沼委員からの御質問がありました。説明をよろしくをお願いします。

(事務局:加藤)

最初に私が説明した段階でお話しすべきことでしたが、資料1の真ん中に掲げたテーマの例ということで、3つほど挙げさせていただきました。これに関しては、いろいろと御指摘いただいている通りだと感じております。

まず、「地域の未来を担う若者人材の育成」というのは、第36次の提言の中に出て来た言葉を

そのまま持ってきました。

2つ目の「未来を担う子ども若者が育つ環境づくり」ですが「育つ」と「育てる」と言う言葉では、あえて「育つ」という言葉を使ったのですが、先ほどから委員の皆様から話があるように、子ども若者ばかりに求めても変わらない。結局、それに関わる我々大人が変わらない限り、子どもにばかり変われと言っても無理なのではないか。子供も大人も共に育つという意味で「育つ」という言葉にしたという意図がございます。

3つ目は、「協働力」という言葉ですが、平成27年の宮城の協働教育の今後の在り方の意見書の中で提言された言葉です。具体的には、そこに書いてあるように、「地域課題に対して主体的に働き掛け、多様な人々と協働しながら、課題を解決する力」です。これも子ども若者だけに必要なものではない。結局、我々大人が身に付けていくことが、子供たちにもそういう力を育てることができるとは思いません。そういう意味合いを生かしつつ、大人自身も変わりながら子ども若者と一緒に地域を作っていくというイメージで考えたというところがございます。

また、事業の成果と課題。これも先ほど加藤委員からもあったように、今の県の施策でどんな良い成果が出ているのか、また、どういうところが課題なのかというのは、委員の皆さんにも分かっていたかと思いません。提言はなかなか難しいと思います。ですので、各班で子ども若者をターゲットにした事業をやっていますので、その辺をより具体的に御説明できればいいかなと思っておりました。以上でございます。

(野澤議長)

ありがとうございます。今、事務局の方から、詳しく御説明をいただきましたが、先ほど中保委員からもありましたが、その協働力という言葉、それから宮城県が取り組んで来た一つの成功として、みやぎの協働教育があるのではないかと思います。やはりここに掲げているような世代を超えて、あらゆる世代が共にというようなことをこれまでも進めて来た。そして、今も組織を挙げて取り組んで来ているわけですから。ただ、長く続くことによって、どうしても固定化してしまうというか、そういうところも見えて来るというところもあろうかと思います。その根底にある理念は間違いないものがあると思いますので、そこをしっかりと捉えて行くというのも、宮城にとっては重要なポイントになるかなと、そんなイメージを持ちながら聞かせていただいております。

さて、もう少し委員の皆様から御意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

須田委員をお願いします。

(須田委員)

私も育成というフレーズよりは、どの子も可能性も伸ばす。大人も共に成長しながら関わりを持って行くという面から育つ環境づくり。さらに協働力。そちらを活かしたいなと思います。宮城県で協働教育というのをずっと進めてきたというのは私も存じ上げておりますので、この言葉を使うのも一つの方法かと考えます。さらに、育成と言うより前に自ら進むということを考えると、今は支援学校にいますが、障害のあるなしに関わらず、同じ時代を共に生きていく子供たち、若者、その人たちが育つ環境づくりということを考えると、障害者教育にも結び付くかなと感じます。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。松田委員、お願いします。

(松田委員)

先ほど事務局から子ども若者は大人と共にというお話がありましたので、それを平たく言えば協働という言葉の意味して行くので、例えば案として「子ども若者が大人と共に主役になれる地域を目指して」とか、「子ども若者が大人と共に主役になれる地域を作る社会教育」とか考えた次第でした。ちょうど今、仙台市市民センターで長年、子供参画事業、若者参画事業など住民参画型事業ということでずっと取り組んで来ていて、現在、仙台市公民館運営審議会で、それぞれの成果と課題を検証している時期です。ですので、どこかの段階で一緒に意見交換会ということとなされると、若者の参画事業について、成果や課題が見えてくるのではないかと思います。まさに同じ宮城として共通の課題に向かうものになるのかなと思ったところでした。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。貴重な情報をいただきました。増田委員からもございましたがやはり共に生きるということ、まさに今言われています共生社会あるいは共創ですね、共に創るとい、そういった社会を目指すということは、一つの方向性が見えてきていると思います。そういったことなどもやっぱり視野に入れて行くことで、若者たち子供たちが活躍できる場面をどのように作って行くのか、まさに環境を作って行くのかということにも繋がって来るかと思うのですが、そんな方向性で、御意見などもいただければと思います。委員の皆様いかがでしょうか。

はい、増田委員。

(増田委員)

事務局のお話を聞いて、子ども若者を大人が関わって一緒に育てて行かなければならないという視点を持っているというのは、本当にすごく大事でそれを聞いて安心しましたし、今、松田委員が仰ってくださったようなテーマが見えてきたかなと感じました。

先ほど、子ども若者というのは広すぎるのではないかという意見がありましたけれども、まず「三つ子の魂」というように、まず3歳までどのように育ったかというのがすごく大事で、例えば12歳の段階から、さらに上に行けるという子ばかりではないとなると、また、その幼児期で足りなかったものをもう一回補ってもらいながら進まなければならない子もいると思うと、私はこの子ども若者という幅広い年代を一つにして、そこは必ずしも一直線には進まないの、いいのではないかなという2つの視点でお話をさせていただきました。

(野澤議長)

ありがとうございます。先ほど松田委員から具体的なテーマということで「子どもと若者が大人と共に主役になれるような、そんな地域を」というようなお話がございました。他委員の皆様いかがでしょうか。

それから、冒頭ですかね、各委員の皆様から出していただきました、例えば、「学んで楽しいとは、具体的にどういうことなのか」また、「子ども若者というのが広すぎる」という御指摘でありますとか、そういったことなども今後整理をする方向でと考えていければと思います。そういったことを踏まえた上でテーマとしていくつか御提案いただければと思います。いかがでございましょうか。

思いつかれたこと何でも結構ですので出していただければと思いますが、よろしく願いいたします。

中保委員お願いします。

(中保委員)

第1回目の会議の時に、「学び方とか関わり方にフォーカスした内容にしてはどうか」ということがありました。そこで、学び方は、様々な世代の方たちが一緒にという形、関わり方としては、現代の必要な課題に対して一緒に学んでいく行くよう形かなと思いました。

学校教育で今頑張っているギガスクールなどのICTの活用もそうですが、他の世代の方々にとってもICTのスキルをアップしていくことや、リテラシーに対して学んで行くというのは現代課題の

すごく大きなことだと思います。また、様々なツールを利用しながら、共に学んでそれが住みやすい地域を作って、関わって楽しくなってくるということに繋がってくると思うので、「共に学ぶ」とか「いろんな世代と一緒に学ぶ」というようなキーワードも入ったらどうかと考えていました。以上です。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。他の委員の皆さんはいかがですか。

本当に今 IT スキルという話がありましたけれども、中学生にスマホの使い方を教えてもらう高齢者の方々がどれだけ楽になれるか、効果が高いか。やはりそういうことは現実でありますので、子供と大人が学び合う場がどんどんできてくる。そうすると子供たちも自己肯定感が高まりますし、人の役に立てたということによって自己効力感も高まるというようなこと。それから、高齢者の方が子供と関わる場面というのはやはり非常に大きい。これは私が尊敬している方が、「高齢者は子供から精気をもらうんだ」と言っていましたけど、そういった関わりというのもいろんなところで出てくるということが大事ななところだと思います。

はい、坂口委員どうぞ。

(坂口委員)

具体的なテーマがある訳ではないですが、思いとして「地域と生きる」とか「地域を活かす」というようなイメージ。私たちの地域というのが命題でありますので、若者たちが地域と生きて行く、地域を活かすという、そんな言葉が入ったテーマ設定もいいのかなと思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。今、キーワードということで、何人かの委員の皆さんからいただいておりますが、どうぞそういったものを皆様からお聞かせいただけると整理させていただきたいと思います。はい、加藤委員お願いします。

(加藤委員)

審議のテーマとして、すごく抽象的な言葉が続いているなという印象を受けていて、もうちょっと具体的な議論のポイントは、一体どこなのだろうというのを考えながら聞いていたところでした。具体的には、先ほど加藤さんが仰られた大人も変わるためにはどういう機会だとか、どういう制度が

あればいいのかなですとか、何かそういう具体的なところまでテーマで出しているのか、いやそれとも、こういう標語的なところが審議テーマとしていいのか考えながら聞いていました。私の意見として、例えば「大人が変わらねば」というところですか、先ほど伊勢委員が仰っていた、「いかに信頼できる大人と出会えるのか」みたいなところで、すごく大切なキーワードだと思っていて、やっぱり現場で求められているのは、特にコーディネーター的人材だと思っていて、子供にとっては安心安全であり、きちんと地域のリソースと繋いでくれる人がいる現場では、協働教育であったり社会教育・生涯学習事業であったりが円滑に進んでいるイメージがあります。そういうコーディネーター的人材をどうすれば県内各地域で育てられるだろうということがテーマになるとか。

今皆さんが仰っているようなことが進むための具体的な仮説があるといいのかなと思うのですが、皆さんいかがでしょうか。ぜひ御意見を聞かせて下さい。

(伊勢委員)

今の加藤委員がおっしゃったことは、10年前の32次の意見書でも同じことを言われています。一回り回って、またここに辿り着けないところがある。第32次では、震災がありこれから必要な人材育成というところでコーディネーターとファシリテーターと明確に書かれてあります。でも、書いてあるだけなんですよね。その後、それがどう反映されたのかっていうのを感じることはあまりなかったのですが、でも協働教育がそこから進んだっていうのは実際あると思います。文科省の予算が投入されて、市町村に社会教育主事の先生方が配置されて協働教育が進んだというところもうかがえます。ただキーになる先生方が異動されたり予算がなくなったり、キーになる先生方が市町村からいなくなっていっている。その状況で、本当にこれから求められるのは、協働力を高めるためのコーディネーションとファシリテーションだと私は強く思っています。そういう意味では、昨年、今年度から県生涯学習課で、社会教育の関係職員の研修や社会教育士の育成などに力を入れ始めていますが、これをいかに現場の社会教育関係職員の方とか、それこそ社会教育主事や社会教育士の資格を持ってらっしゃる方々に力を発揮してもらえるか。そして、資格がなくても宮城県内どこの地域でも、学んだことを発揮してもらうにはどうしたらいいかということを考えていました。

一つ事例を言うと、まさに昨日一昨日に名取市閑上公民館の方で、子ども若者が中心になって動き始めているのがあり、面白いように地域のシニアの人とか、地域の人たちが活性化しているのが伝わってきます。それはどうしてできたかと言えば、その場には、誰が来てもウェルカムというか受け入れられる関係性とか温かい場作りみたいなところをみんなが意識しているから、初めて来た人でも安心して意見が言える。また、東北大学の社会教育の実習生が来たのですが、

閑上弁を喋るおばあちゃんとおじいちゃんの場の打ち合わせに同席してもらいました。全く分からない方言を使った閑上弁カルタをみんなで作るとか、そういうところからスタートして雰囲気を柔らかくしながらやってくる。そこからプログラムを作っていく。コロナ感染症拡大で3年間まともに体験とかできていない学生さんたちではありますけども、考えたプログラムを実現したいとか、また来たいとかというところへ発展していく。そこには、受け入れる地域の皆さんとの関係性があるというのが環境が整っているということだと思うのですが、そうした環境を作るために必要なことを提言書の中に入れられるといいのかなと思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。他の委員の皆さん。

(増田委員)

加藤委員が仰ったことは本当にその通りで、テーマは最終的に出て来るもので、私たちこの37次で一番ここに力を入れてやろうということで、みんなで意見が一致した時に「それを表すテーマこれだね」というのが出てくるのかと思いました。伊勢委員が仰ったように、本当にコーディネーター無しではちょっと成し得ないということも、私も本当に実体験から感じています。

数日前に沖縄から北海道までの先生たちが関わる研修会で発表させていただいたのですが、その時も最終的にはコーディネーターがいなかったら、いろんな繋がりには難しい。コーディネーターがどれだけそこを温かい、誰でも受け入れる場作りをするということに関わっているという結論に達しました。37次では、そこもとても大事なテーマではないかと感じました。

(野澤議長)

ありがとうございます。はい、よろしいですか。

実はこちらの会議、前次の会議もそうですが、社会教育に関わる職員、その人材の育成、まさにコーディネーターとしての育成ということも視野に入れながら様々な取組をされているわけです。先ほど伊勢委員からもありましたが、やはり行政の人たちもそうですし、学校の先生方もそうですが、どうしても異動があるということです。そうすると、熱心な担当者がいた時はいいけれども、いなくなってしまうと、そこで急に温度が下がってしまう。そういったことを防ぐためには何が必要かという、やはりこれは地域の中に生きる人たちの中で、リーダー、コーディネーターの働きができるような方たちがいかに育っていくのかということが必要なのかなと。

私は長く仙台市に関わっていたものですから、仙台市の場合ですと、「市民協働のまちづくり」ということで、様々な取組をする中で、どんどんそういった人材が増えて、そして今活躍されていらっしゃる。そのきっかけは、学校ですと PTA の役員を経験されたり、子ども会育成会の役員を経験された方がその後も繋がって、やがて地域の中で重要なポジションを得ていくというような方がたくさんいらっしゃる。これは県内どこの市町村でもやはり同じようなことがあると思います。それから事務局の方で先ほどお話いただきましたが、生涯学習課の中のそれぞれの班で関わっていらっしゃる様々な県の事業がありますが、そこの中でもやはりたくさん成果を生み出していただいている。まさに家庭教育支援の充実というのも宮城県の一つの特徴だと思います。そういったことなどを繋ぎながら活かすことができるといいですかね。そういった方向性などもみんなで話し合っていけたらいいと思います。

他にいかがですか。委員の皆様せっかくですので御意見をいただいて。

はい、加藤委員をお願いします。

(加藤委員)

私も、協働教育のプラットフォーム事業を活用しながら、コーディネーターを気仙沼市内の中学校でさせてもらったりもしていたので、そういった制度に大変お世話になっていたのだなというのを今かみしめていました。今まさにどんどん予算が縮小されていて、元に戻りつつあるみたいな側面も否めないところはありまして、大きな課題だなと思う一方、じゃあこの10年間の大きな一つ成果と言いますと、震災直後に地域でまさに復興の過程で地域と学校の協働教育ですとか、社会教育に触れて来た当時の小学生中学生、高校生が今20代になって、地元の教育やまちづくりに興味関心が高い子が多い印象を受けています。今、気仙沼で「マイプロジェクト」という取組を高校生とやっていますが、チャレンジを起こそうとして、地域に出て行くと、大人たちに「いいぞ、いいぞ。やれ、やれ」と応援してもらう。その応援してもらった経験がすごく自分の自信に繋がって、それが結果的に地域の愛着に繋がって大学に行ってまちづくりについて学びたいという子たちが非常に多い。そういった子たちが一つの大きな資源として見てこの第37次だからこそ、そういった方々も巻き込みながら一緒にまた次のステップに進んで行けるような前向きな取組に繋がれたらいいなと思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。

(伊勢委員)

今、加藤委員も仰っていただきましたが、震災当時小学生とかそういう年代だった子たちが、20代の若者になって、私もこの前言われて本当に感動して涙が出たのですが、「石巻に恩返しをしたい」と言うのです。大変な状況を経験して、今でも大変な状況にある中で、様々な大人の人たちに関わって、学校の先生がきっかけだったり、社会教育の場でいろんな活動をしている人たちだったり、その中には決して良質な大人だけではない場合もある。傷ついたりした経験もちろんあって、でも、やはり地元地域に貢献したいという意識をもっている若者は、一人や二人ではないのです。そういう経験というのがすごく大きいなというを感じています。その年代がちょうど今、若者と言われる年代なのだと思います。逆に高校生になると、今の高校生は、震災の時の記憶がないので、震災を経験した意識は、だいぶ違うかなと感じています。

だからこそ、そういう小中高校生、もしくはその下の年代の子たちが生きていくところに、「私たちは何ができるのだろう」「どんな学びの場を作っていけるのだろう」というのが、これからの課題だろうなと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。はい、それではですね、本当に委員の皆様から様々な御意見、御提案をいただきました。それを一度こちらの方で事務局の方と一緒に整理をさせていただきながら、次回に繋げていきたいと思えます。今日は、もう一点だけ皆様に御確認をいただきたいことがありまして、資料の2を御覧いただきたいと思えます。

今後の進め方について事務局の方でこういったロードマップ的なものを示してくれております。それでテーマというものをこれから決めていきますが、それに合わせてどんなことに取り組んで行ったらいいかということが記述されています。そこから提言の具体的な内容に繋げて行くというような流れですけれども、このイメージにつきまして、委員の皆様から御意見をいただいております。こういった流れで進めたいという一つの基本的なことについてはいかがでしょうか。よろしいですか。

内容については、様々な御指摘をいただいているところなので、そのところはこれから詰めて行く必要があらうかと思えます。

まず一つは、テーマ設定の理由ですね。社会的な背景とか、若者たちの現状であるとか、そういったものの分析というのがもっともとなされていかなければならないという御意見もいただいていたと思いますし、テーマに繋がるキーワード的なものも、たくさんいただきました。さらに、具体的に調査を行っていく時の調査の項目であるとか、先進地というところで具体的な提案などございましたら、教えていただければと思います。

はい、伊勢委員。

(伊勢委員)

調査方法ですが、今回のテーマの方向性は子ども若者ですよ。例年、私たちが訪問すると、訪問先の方々には「県の社会教育委員の皆さんが来た」と、すごい手厚いおもてなしをしてくれます。準備もして中には教育長さんとかもいらして。でも、私個人的には、本音を聞きたいと思っております。すばらしい取組の様子を伺えるのはありがたいのですが、子ども若者の取組を聞きたいと言ったときに、お話してくれるのは関わっていらっしゃる大人ですよ。それはもちろんいいのですが、そういう活動の現場とか子ども若者のリアルな姿を見られるとうれしいですね。子ども若者目線でそういう場を私たちも体験させていただくとか、そういう調査はできないでしょうか、という提案です。

(野澤議長)

子ども若者がテーマだけに、本音で語ってくれるような場が作れないかという提案だと思いますが、選び方とかいろいろな制約はあるかもしれませんが、同じテーブルに着いて自由に意見を聞かせてもらうというような場の作り方というものもあるかなという気がします。ありがとうございます。他に皆様いかがですか。坂口委員どうぞ。

(坂口委員)

調査場所等で先進地というのがあるならそこに行けばいいのかも知れませんが、学ぶだけというよりも、例えば同じようなテーマで悩んでいるところ、これから課題解決に向けてやろうとしているところへ行って話を聞くというのがいいかなと思いました。あまり先進地にこだわる必要はないのかなという気がします。

(野澤議長)

ありがとうございます。他の委員の皆様いかがですか。

遠藤委員をお願いします。

(遠藤委員)

私も前期しか存じ上げないので、どのように調査対象場所を選んでいくかということなのですが、子ども若者がテーマということなので、先ほど加藤委員と伊勢委員からもお話があったように、20代とか30代ぐらいの方で、仕事をしながらも地域とか地区の公民館に関わっている方がどんなライフステージでどんな大人と出会ったり、社会教育施設と出会ったりして、今ここにいるみたいなそういったお話を聞くのもいいのではないかと思います。

今までは対組織にヒアリングしてきたと思うのですが、対個人というのもあり得るのかなと思いましたが。そうした時に、公民館とかから推薦してもらおうと公民館のことだけが結構フォーカスされてよく話さなければならないというプレッシャーが出やすいのかなと思うのですが、場合によってはそういった公民館推薦でも公民館の分は一部分で、その他のことも教えてくださいということでお話を聞ければと思います。やはり人の人生と成長を少し俯瞰して見ることもいいのかなと思いました。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。他に委員の皆様いかがですか。

先ほど伊勢委員から女子学生という話がありましたが、女子にこだわる必要はないのですが、学生たちに話を聞くというのもありなのかなとおもいました。学生と繋がるプロジェクトなど事業展開をしている例もいろいろあろうかと思うのですが、何か委員の皆様で御存知の取組とかございますか。事務局の方ではいかがですかね。何かありますかね。ありがとうございます。思いついたら教えてください。

(事務局:加藤)

何人かの委員さんからメールで情報提供いただいたのですが「かく大学」という角田市の取組や伊勢委員が仰っていた名取市の取組とか、石巻地域で活動している「耕人塾」など、我々が分からないところで、地域の大人と若者が学び合っているところはあるのだと思います。

また、繰り返しになりますが、生涯学習課で行っている子ども若者向けの事業もありますので、

今後時間をとって、具体的な中味や成果と課題を皆様にも聞いていただく機会を設けていければと考えております。以上です。

(野澤議長)

はい、情報ありがとうございます。今、委員の皆様からも情報提供いただきましたので、そういったことなども活かして行けたらと思います。

それから、聞き取り調査ですが、先ほど遠藤委員からもありましたが、個人の単位で話を聞くというようなこと、若者たちが今、何を考えているのか、どんなことに興味・関心を持っているのか、そして、大人と関わる時に何が必要なのかなど。そういったことを、本音で聞き取ることが出来れば、我々の審議の中でも非常に役に立つ内容になるのではないかと考えたところでした。

それでは、意見書作成までのイメージというのは、事務局の資料2の流れで進め、内容については、皆さんからの御意見をそこに盛り込みながら進めていくということで、やらせていただければなど思っております。大丈夫でしょうか。

では、本日も、委員の皆様から忌憚のない御意見を聞かせていただきました。ありがとうございました。

それでは最後に、今後の審議の計画ということについて提案を事務局の方からお願いをしたいと思います。今日いただきました一件は、繰り返しになりますが、もう一度事務局の方と整理をさせていただいて、また皆様に御提示出来るようにして行きたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。事務局の方から説明をお願いいたします。

(事務局:加藤)

御意見ありがとうございました。議長様からお話があった通り、今後整理して次回で提案させていただきたいと思っております。

では、資料3を御覧ください。第3回目ですが、以前の計画ですと12月に計画していましたが、11月上旬に繰り上げたいなと思っております。その際には、先ほど説明させていただいた研修というということで、子ども若者をターゲットにした県の取組について説明をさせていただきます。4回目は、年明けの1月。ここでは、さらにテーマの詳細についての話合いや具体的な視察などを行えればと思っております。

また、11月11日に県庁で社会教育フォーラムということで、第36次のテーマや提言を受けて県内の社会教育関係者を対象に、学ぶ場の提供や情報交換の場、繋がる場の開催を予定してお

ります。要項ができ次第、メール等でお知らせいたしますので、委員の皆様にも御参加いただければと思います。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。それでは、他に事務局から何か御説明、御報告ございますか。

(事務局:加藤)

ありません。

(野澤議長)

よろしいですか。それでは、本日の審議はここまでとさせていただきます。委員の皆様、御協力ありがとうございました。では、事務局にお返しいたします。

(司会:加藤)

では、野澤議長様、本日も大変ありがとうございました。それでは、その他に入ります。報告、連絡等で何か委員の皆様、事務局からございますか。

では、以上をもちまして、第37次宮城県社会教育委員の会議兼第12次宮城県生涯学習審議会を終了いたします。本日も大変ありがとうございました。